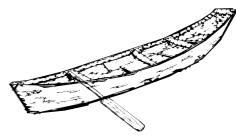


継ぐのは技と、魂



現役で、伝統のサバニを糸満で造るただ一人の職人、大城清さんと、その弟子の高良和昭さん、2人に話を聞きました。受け継いでいたのは、技術とその奥にある糸満の魂でした。

サバニは、沖縄の海人が漁に使用してきた木の舟です。金属の釘を使わず、フンドゥーと呼ばれる木製の接合材や竹釘を使い、荒い外洋を帆一枚で走りまします。糸満でその伝統の技法を受け継ぎ、いまもサバニを造るのは、大城清さんと、その技を継ぐ、弟子の高良和昭さんです。

終わりがない

―高良さん
カヌー選手として糸満から県外企業に入社して、練習の合間で家具を作っていました。26歳で糸満に帰ってきて、サバニに惹かれたんです。荒波の中を、

帆一枚で走れる。それがすごく魅力的で。実際にどう造られているのか、自分のサバニも造ってみたいという思いから清さんのもとを訪ねました。
最初に渡されたのは、細い竹でした。ただ丸く削る。そうすると、板と板をつなぐ竹の釘になります。忍耐力がきますよ。気の長い仕事です。

刃物が研げないと、何も始まりません。切れない刃物だと、無駄に力が入る。だんだん研げるようになって、仕事が楽になっていった。そうしたら、今まで見えなかったものが、どんどん見えてきた。仕事が、面白くなってきてたんです。20年近くやっても、



おちしろ 大城 清さん

サバニは頭の中に

の魚は、時間が経てば傷んでしまう。だから、いかに早く帰ってくるか。サバニの速さには、理由があるんです。昔の人がやれたことを、もう一度。そう思っ

―大城さん

父から教わったときは、細かい指示なんてなかった。小さいころから、父の仕事姿を見ていたから、それをまねていく。昔は設計図どころか、サバニを造る道具さえ少なかった。

いまはメモを残している。だが、書いた自分にしか読めない



たから 高良 和昭さん

まだ毎回、気づくことがあります。終わりがありませんよ。
いまは、一艘のほとんどの工程を、私手がけています。でも、木に線を引き、切断場所を決める墨入れという作業は、経験が足りない。清さんとの経験の差を感じています。

昔の誇りを現代で

高良さんは、新しい工夫よりも、できるだけ昔のサバニの形に近づけたいと考えている。なぜ昔に近づけるのか。

昔の人は、帆を上げて漁に出て、魚を捕って帰ってくる。そ

技術だけを覚えても、ただの形。

その「形」に、命を預けられるか―。

メモ。ほかの人が見てもわからない。サバニは頭の中にある。

ただ、サバニは海の上で命を預けるもの。侍の刀と一緒。だから、サバニを造るときに、いい加減な仕事はできない。

技術の前に糸満の魂を

技術の継承というが、大工仕事をしている人なら2年、3年あれば作れるようになる。難しいのは、その前。魂の継承―。これが、どうしても必要だ。

サバニを造る。そう聞くと、ただ技術を覚えるとイメージするだろう。だが、造ることに心があるか。どれだけ長く、この糸満の地に足を置けるか。そこが問われる。技だけを覚えて、その土地への想いを持たないまま、よその場所へ移って技術を使ってしまう。それでは、ただの「形」になってしまう。その

「形」に命を預けられるか。だから、長い時間をかけて魂を入れていく。私たちも、そこは気をつけている。

継ぐ人がいるということ

では、その魂を継ぐ人は、糸満生まれでなければならぬのか。大城さんは、首を振った。

もう、糸満の人間とか、よそから来た人とか、そういう価値観は古い。今の糸満の海人を見てみる。市外から来た人たちも多い。ここに来て10年、20年。糸満の漁業の歴史を引き継ぎ、糸満の海人として、胸を張っている。それはサバニを造る人も同じ。大事なのは、生まれた場所じゃない。この地に根を張り、糸満の誇りを持って、しっかりと伝統と歴史を継いでくれる人がいること。

